



柴田耕太郎  
Shibata Kohtarō

# 英文翻訳テクニク

CHIKUMA SHINSHO

……様々な文化、様々な人間の営みを理解し伝えるために、広範な領域をカバーするもっと多くの翻訳家が必要となってきた。ぜひ、あなたにも仲間に加わっていただきたい。翻訳は、いまでも「重大」で「興奮」に値する営みだ。……

ちくま新書

099



ちくま新書

099

## 英文翻訳テクニック

1997年2月20日 第1刷発行

著者

柴田耕太郎

(しばた・こうたろう)

発行者

柏原成光

発行所

株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3 郵便番号111

振替00160-8-4123

案内

048-651-0053(サービスセンター)

装幀者

間村俊一

印刷・製本

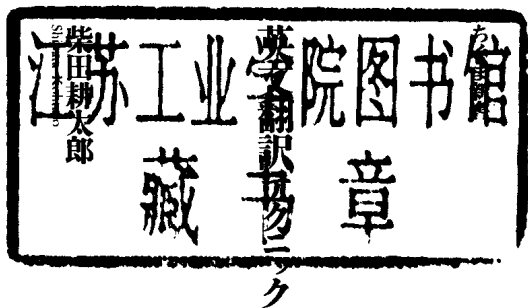
株式会社精興社

ちくま新書の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© SHIBATA Kohtaro 1997 Printed in Japan

ISBN4-480-05699-8 C0282





## 英文翻译技巧

### 【目次】

はじめに 007

## 第1章 入門編 009

### 1.1 翻訳家の種明かし 010

訳書を出したい 010

翻訳はビジネスである 012

常識と想像力 017

### 1.2 翻訳家は生活者 024

4つの市場 024

「一般書」翻訳を推す理由 026

出版翻訳家の懐事情 027

参入の準備 028

### 1.3 翻訳家の裏作業 033

リーディング 033

校正 036

## 第2章 基礎編 041

### 2.1 語学力を伸ばす 042

どんな英文を読むか 043

どんな辞書を使うか 047

どんな訳語を選ぶか 052

## 2.2 調査力を伸ばす 059

歴史的事実や情景を探る 060

現物もしくは、その写真・図版を探す 062

ものの本には載っていない言葉を探る 066

## 2.3 表現力を伸ばす 069

どこまで訳すか 070

よい表現 074

## 第3章 実践編 077

### 3.1 タイプ別 078

大量翻訳 078

厳密な翻訳 086

意をとる翻訳 093

### 3.2 分野別 107

伝記 107

ドキュメンタリー 125

音楽 135

歴史 147

エンタテインメント 157

## 第4章 番外編 171

あとがき 193





## はじめに

「翻訳に一生を賭けるなどは、ちょっと常識でいっても理解に苦しむ」と英文学者の中野好夫は言った。

20年も翻訳で食べている私なぞ、お恥ずかしい限りだが、それでも近頃自由業でありたい、社会に貢献したい、ことばにかかわってきたいと真剣に悩む翻訳家志望者に会っていると、この稼業まんざらでもないという気がしてくる。

そういう人たちのために、前著『翻訳家になる方法』（青弓社）では、どうやって仕事にしてゆくかに力点を置いたが、この本では、一回限りで終わらないプロとして生き残れるだけの実力を生むファンダメンタルズを示す。

いくら既存の翻訳をケナしても誤訳・悪訳はなくならない。よい翻訳書を出すにはどうすべきか根本となる心構え・常識と分野ごとの定石をここでは明らかにしてゆきたい。

翻訳が一部大学人の余技、ギルド的翻訳業界人の“占有物”から解き放たれますように。力のある新人がたくさん出てこられますように。ビジネスマン（ウーマン）が恥をかかない訳文をつくれますように。

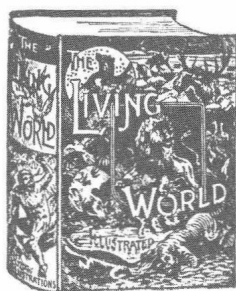
この本がいささかの刺激となれば幸いです。



# 入門

# 編

第 1 章



## 1.1 翻訳家の種明かし

### 【訳書を出したい】

俺だって、あと半年もすれば、地方の大学の語学教師になり、やがて一冊位訳書も出すだろう。そしてその時は、俺だってやはりちょっと興奮し、熱っぽい後書きを書き、そして、少しの間、幸福になるだろう。

(柴田翔『されどわれらが日々』)

ちょっとシニカルなこの文章は1963年に書かれた。

闘争に疲れた後の気の遠くなるほどの時間。学界で名をあげる功名心は既に失せている。それでも「各種の時間潰しの堆積にすぎない」人生の合間に「ちょっと夢中になれる」ささやかな自己満足は得たい。

主人公が翻訳に目をつけたのは故ないことではなかった。翻訳需要が限られていた当時、訳書を出すことは、専門家と見なされていた大学教員にとっても「重大」で「興奮」に値する行為だったのである。

翻って現在、一年間に出版される翻訳書の数はいくらも4000冊を超えるに至った。科学や文学といった大学教員お得意の分野ばかりが翻訳されるわけでもない。出版翻訳需要は、量、分野ともに大学教員の“余技”でまかなえるレベルをはるかに超えてしまった。

そもそも、昔から、名のある大学教授の訳したものが必

ずしも名訳だったわけではない。とんでもない“迷訳”も少なからず流通していた。悪いものは時の流れのなかに消えていってしまっただけの話である。例えば、旧制高等学校の英文学教授某氏は、文学の潮流に少なからず影響を与えた『表象派の文学運動』（アーサー・シモンズ）をいち早く訳す榮譽を担ったが、その冒頭で、「彼の最近の作品」と訳すべきところを「彼の最後の作品」と訳してしまっている。お察しの通り、last といえば最後、と思い込んでいたようだ。こんな訳文を押しつけられては被害甚大だ。

そこまでの誤訳でなくとも、あまりに“難解な”訳文を前に「俺は頭が悪いのか」と勉学の志を途中で投げ出した人もいるのではないだろうか。自分が理解することと、それを他人にもわかるよう表現することが別物だということをご存じない「先生」が昔はけっこういらしたのである。

時代は変わった。

知識人という言葉がほとんど死語になりつつあるように、いまや国民の知的レベルは相当高くなった。たいていの知的作業なら誰でもこなせる時代になったのである。いや、マスコミに登場する生半可な知識人よりはよほど一般人の方が知性と教養に長けているとさえいえるだろう。そして、語学力では若い世代に軍配が上がる。新しい情報を取り入れる手段も電子メディアやネットワークの発達により業界のワクにとらわれず国民の手に広く開放された。出版翻訳が大学教員の“専売特許”たる理由は、もはや消失したのである。自分の持てる能力を発揮して訳書を出してみたい、と考える人が今日数多くなっているのは、いわば時代の必然だ。

翻訳マーケットの事情も追い風になっている。国境を越えたコンピュータ・ネットワークの時代にあって、電子テキストも含めた広い意味での翻訳需要は増大する一方。様々な文化、様々な人間の営みを理解し伝えるために、広範な領域をカバーするもっと多くの翻訳家が必要となってきた。ぜひ、あなたにも仲間に加わっていただきたい。翻訳は、いまでも「重大」で「興奮」に値する営みだ。

ただし、翻訳家として生きていくということは、一生に一冊訳書を出して「幸福」な気分になることとは違う。大学教員や給与所得者と違って、一度「なった」からといって地位や収入が保証されるわけではない。町工場の経営者といっしょで、常に良質の商品を供給し続けてはじめて生き残ることができる。それまで自分が苦手としていた分野でも、無関心であった事柄でも、くらいついていく執念が必要だ。自分なりの翻訳スタイルを少しずつ作り上げながら。

### 【翻訳はビジネスである】

語学ができれば翻訳家になれるわけではない。日本語ができて俳優になれるとは限らず、歌が歌えても歌手になれるとは限らないのと同じである。

原著者が味わった生みの苦しみと書く喜びを追体験し日本語で示す表現者が翻訳家だ。昔物語に聞く「生活費を稼ぐため」「渡航費を捻出するため」片手間でできるというイメージは捨ててほしい。

恐れもせず悔りもせず、翻訳家という仕事がどんなものか、まずは、しっかり見定めていただきたい。

## 〔翻訳も商品である〕

翻訳業という仕事があることは誰でも知っている。けれど、翻訳もまた商品であることは意外に知られていない。

大学教授をはじめ本業を別に持つ人の翻訳がえてして迷訳・珍訳になりがちなのも、そのためだ。彼らにとって翻訳とは、あくまでサイド・ビジネスに過ぎない。少々出来が悪くても締切りに遅れても本業の評価が下がるわけではない。自然、専門外のことや難解な言い回しに遭遇すると「エイヤッ!」となるし、読者に読みやすい訳文を提供しようというところまで気がまわらない。これは大変困ったことなのである。いかにサイド・ビジネスといえども、出版され店頭に並ぶからには商品にはほかならない。売れる売れないは別にして、消費者に多大な迷惑をかけるようでは商品失格。出版物の場合、誤りが書かれていたり、論理が矛盾していたり、日本語として理解しづらいものは欠陥商品といっていいただろう。

長い間、そういった「半製品」「試作品」程度の翻訳に慣らされてきたせいもあるのだろう。翻訳家を志望する人たちの間にも、翻訳が商品であることを理解していない人が大勢見受けられる。新人登用のオーディションをしていて、「別に英文読解のテストをしているわけじゃないのに」と呆れてしまうことが少なくない。翻訳業界においてもオーディションの本質は変わらない。どの製品（翻訳）が最もクライアント（発注者）のニーズに合っているかを秤にかけるため行っている。演劇でいえば主演俳優を決めるようなもの。自治体が大型コンピュータ導入をめぐる業者プレゼンテーションさせるのと何も変わらない。その場に、

こちらが相当手を加えない限り使い物にならないような「半製品」を出されては、言葉も出なくなるというものだ。

それでも出版社なら編集段階で手を加えてくれるのではないか、と思っている方もいるだろう。残念ながら、出版物の回転が異常に早い今、そんな余裕のある出版社は皆無に等しい。編集者一人で月に何冊も担当しているのだから無理もない。訳者があとがきで「翻訳が編集者と訳者の共同作業であるのを知った」などと悠長なことを言っていたのは、もはや一昔も前のことなのである。少なくとも新人翻訳家に関する限り、用字用語など表記上の問題を除いて「ほぼ完成品」といえる翻訳を出さなければ到底使ってもらえない。手直しに時間がかかるようでは全体の生産効率が下がるからだ。

翻訳家を志望する人には、翻訳も、工業製品と変わらぬ「商品である」ことを、まず頭にたたき込んでもらいたい。

### 〔商品未満の訳文〕

それでは、どんな翻訳が商品として価値が高いのか。生産者サイドに立っているなら、そのまま印刷できる状態になったものもいい翻訳だ。つまり、編集者や校正者、あるいは監修者の手を煩わせずにすむもの。また消費者サイドに立つならば、一読してすっとわかる文章がいい翻訳ということになる。

こう書くと、「誤訳はともかく文章に客観的な基準があるのか」「所詮、好みの問題ではないか」といった反論が聞こえてきそうだ。もとより文章の善し悪しを判断する絶対的な基準はない。けれど、出版してもおかしくない水準と



いうのはある。ちょうど工業製品が一定の水準を満たしてはじめて市場に出回ると同じことだ。とりわけ訳書の場合、原文を過不足なく伝えることが求められる。原著作物の理解を妨げたり、読む気をなくさせるような表現は慎まなくてはならない。

例えば、以下に挙げる訳例などは「商品未満の訳文」の典型だ。校正前のものだが、極めて雑な上がりである。

これは16世紀に織られ、現在はフランスのパリのクラニー博物館??に所蔵されている『ユニコーンを連れた貴婦人??』連作のうちの1枚です。連作全体を通じてライオンとユニコーンが、おそらくこのタペストリーを発注したルーヴィスト??家の紋章入り旗や盾形紋をサポートしています。5点のタペストリーは様々なシーンを表していると考えられています。この作品は「傾聴??」と題され、盛装の貴婦人が手風琴を演奏しており、上方に金色のライオンとユニコーンが見えます。

### ●不明な点を調べるのも翻訳家の仕事

まず気になるのが??マーク。「確かなことはわからないので、後はそちらで調べてください」というつもりなのだろう。しかし、重要な固有名詞をこの調子で訳し飛ばされてはかなわない。専門事典や類書にあたって、きちんと定着した訳語を選ぶべきである。そうすれば、この作品が連作『貴婦人と一角獣』のひとつ「聴覚」だということがすぐわかる。

### ●固有名詞は常に原語読み、もしくは通常言い習わされている訳語を